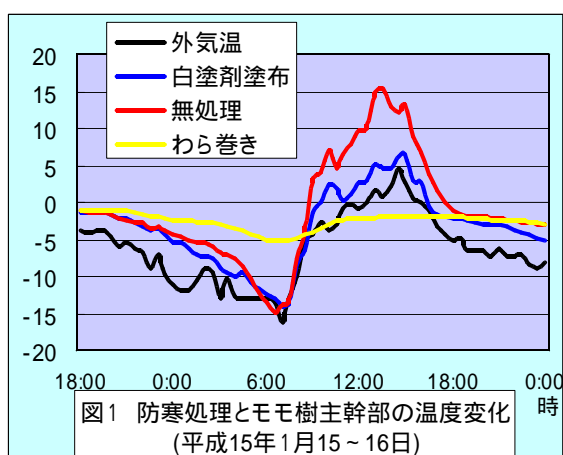


果樹の耐凍性と凍害対策

果樹試験場

12月頃から、あちらこちらの果樹園で写真に示したような光景がみられるようになります。これは樹体を凍害から守るために行っている防寒対策なのです。

果樹の耐凍性は季節により異なり秋の低温に伴って徐々に耐凍性が高まり厳寒期には最大の耐凍性を示し、その後気温の上昇とともに耐凍性が低下していきます。この耐凍性は樹種により異なり、リンゴでは-25℃、ナシ、ブドウでは-20℃、モモでは-15℃くらいまでは耐えられると言われていています。ところが、最近はこんな温度にはなりません。凍害により枯死したり、障害を受けることが多くなってきました。地球の温暖化現象にも係わりますが、暖冬年が多く、休眠覚醒後、目には見えませんが生育が進み耐凍性が低下し一時的な低温で被害を受けやすくなります。また、直射日光による樹体温の上昇は耐凍性の低下を助長します。そこで、図1に示したように凍害を受けやすい樹体部位の保温と温度変化を防ぐ「わら巻き」や光を反射し日中の樹体の温度上昇を防ぐ白塗剤塗布などの凍害防止対策を講じます。なお、「わら巻き」は手間がかかりますが、樹体の温度変化が非常に少なくもっとも優れた防寒対策です。



写真上：ブドウ「巨峰」のわら巻き

写真左：凍害を受けやすい部分に白塗剤を塗布されたリンゴわい性台木樹の若木

担当者	白田 彰	電話番号	026-246-2411
-----	------	------	--------------

[知って納得コーナーに戻る](#)

[果樹試験場に戻る](#)